

第41回 ちゃんぽんミーティング (平成24年7月2日)



テーマ

「防災のまちづくり」

こんな意見が出ました！

防災マップは作ることが目的ではなく、作る過程で、いろんなメンバーで気付きあってワイワイ話し合いながら繰り返し作業することが大事。

人に対して干渉しない、それは大事なこともかもしれませんが、それが災害の時に、果たして皆さんが幸せになれるかなと疑問に感じます。

町が整備されると災害も変わる。長崎市に合ったスタイルで防災の啓蒙活動を続けていきたい。

市内に自主防災組織がたくさんつくられていますが、あまり機能していないように感じます。役員の引き継ぎ等で難しいところがあるのでしょうか。

『火災がどうやって起きるのか』ということをも具体的に知らないと、当事者意識がめばえません。それを知識として知っているだけでは、なかなか行動までは結びつかないです。

- ◆実は「つながり」こそが、目には見えないけど一番の「セーフティーネット」なんです。
- ◆防災は地域だけが頑張ってもダメだし、行政だけでも、個人だけでも上手いかわない。みんなが力をあわせないといけないことです。



田上市長

参加者・市長の主な発言



今回は、ちょっと変わった「ちゃんぽんミーティング」だと思います。防火研究会の皆さんや、消防局の女性消防団員の皆さん、大浦青年会のかたも、まさに防災マップを皆で作ろうよってということで、地域を回っている人です。消防防災に携わる方とそうでない方、半々ぐらいなので、是非、色んな情報を出し合っただけでヒントを探す、そういう場所にできればと思います。

北陽町自治会

地域の連帯感が薄いと感じています。子どもたちも地元には帰ってこない。自治会の役員のなり手がいない。何とか連帯しないといけないということで考えていたときに、自主防災組織のことを聞き、「自主防災チーム」という名前で活動を始めました。あえて「チーム」としたのは、仲間、実働という感じがするからです。

自立自助、自分たちで自分達の身の安全を守る意識を高めようというのが1つの目的。もう1つの目的は、地域が非常に高齢化しているため、自治会を担う人が非常に少ないので、60歳代の熟年を集める手段としてやっています。

平成9年に、地域で山崩れがありました。私は当時、まだ現役で自治会活動には、ほとんど関心がなかったのですが、その当時の自治会長の話によると、天気の良い日に、近所の人が「何か石ころがころころ落ちてくるよ」と話してたらしい。当時の自治会員の役員は、防災に関心が高かったので、天気の良いのに石が落ちてくるのは、危ないのではと、消防や市役所や県に連絡して回ったんです。その後、実際山崩れが起こり、家は3~4戸崩れたけど、怪我人は1人も出さずにすんだのです。

でもそんな時、呼びかけても、みんな、なかなか避難しなかったそうです。天気の良いのに崩れる訳がないと思ってるんですね。半ば強引に市役所の人、県の人、消防の人に呼びかけてもらった。その結果、人的には被害がなくて、このことで全国的に非常に有名になった。でも、防災意識が地域の自治会に広まったかということ、そうでもなかったと私は思います。

そんな中、自主防災チームができたのは、個人個人の中に、自分たちの地域は自分たちで守らなければならないという意識が芽生えたからだと思うんです。

ほとんどの自主防災組織は自治会組織と重なっているように感じます。そうだとすると、北陽町自治会では、役員が1年で交代するので、その自主防災組織のメンバーが全部変わってしまう。それでは継続できないと思い、自治会とは別組織で自治防災チームを立ち上げました。チームでは、隊長、副隊長、そしてグループを3つ位分けてそれぞれ班長を置きました。その人達は、希望して、手を挙げていただいた人で、自治会長が委嘱して、永続的に自主防災の活動をしていただくことにしている。そういうシステムにしています。



北陽町自治会の話は、全国的にもすごく話題になりましたが、地域の中ではそんなに、それがきっかけで防災意識が広がったとか、浸透したということになってないとの話がありました。とは言え、その時の自治会の皆さんの活躍と、行政とちゃんと連携をとることで人の命が守られたことは事実なんです。それはものすごく大事なことだと思う。それを実際にやって見せてくださったひとつの例だと思います。市内の中でも色々な事例があるので、防災危機管理室が一番あちこち回っていると思うので、いくつか、もし「こんな地域もありますよ」ということがあったら後で紹介してください。



自主防災チームを作って、最初にやったのが防災マップ作りです。60代の熟年を中心に、40代～80代で20名ぐらい常時参加している。防災危機管理室にも来てもらって、幼い子どものようにワイワイいながら作業しました。「自分の町にこんな危ない場所があるのか!」とか「初めて気づいた!」という気づきがありました。そして、でき上がった成果物よりも、その過程が非常に大事ではないかと思いました。

それとプライバシーへの関心が高まり、要援護者の情報をどう共有するべきかという議論が起きました。結論的には、隊員だけということになりましたが・・・。



非自治会員のことも議論しました。もちろん、自主防災チームは自治会員ではない人も避難させます。これは人道的な立場からです。近くに住んでいるなら、しないといけないうらと。また、隣近所との仲の良し悪しもあるので、隊員が要援護者を受け持つという、担任制としています。



今日は、防火研究会の皆さんに、高齢のために火災となったというケースが多いかをお聞きしたい。また、高齢者が火災を起こさないためにはどうしたらいいのか。参考になる事があったら教えていただきたいと思います。



防災マップは、作ること、完成させること、配ること、それらが目的でなく、過程が大事で、一回地域で作って、もう一回違うメンバーでやって、前に作ったものと比べて気づいた点、気づかなかった点が見つかる。繰り返すことも大事です。今はとりあえず一回市内中やっていくことを一生懸命取り組んでいるので、地域でそういうことが少しずつ回りだすと、今度は子ども、次は先生、包括支援センターの方々等に入ってもらおうとか、いろんなことができるのではと思います。

小瀬戸町西自治会

2年前に広報ながさきで見た「防災リーダーを募集」の記事がきっかけで、市民防災リーダーになりました。東日本大震災の際に、長崎でも津波警報が発令されたので、近所の神の島の1キロ防波堤へ地元の23分団の消防の方と一緒に巡回に行きましたが、釣り客のほか、興味本位で津波を見に来たという人もいて、「長崎は、地震にはあまり慣れていないな」というのを痛切に感じました。



3年前の大雨で、家の裏の法面が崩れたことがありましたし、一昨年は妻の車が埋まり、去年は隣の人車が埋まりました。近隣の住民の方が右往左往するだけで、どこに電話していいのかわからない、どう対応していいのかわからないという状況で、これではいけないと思いました。防災リーダーになってからは、近所の人から防災について尋ねられることが多くなりました。

7.23の長崎大水害直後から市内では自主防災組織がたくさんつくられ、小湊地区にもあるが、あまり機能していないように感じます。役員の引き継ぎ等で難しいところがあるのでしょうか。

近所にも独居のお年寄りがいて、災害時の避難方法のことなどを考えますが、自主防災組織と自治会との連携など、ほかの地域がどのような活動をしているのか知りたいです。



自治会の皆さんから出たのは、高齢化の問題や皆さんの関心がなかなか防災のほうに向かないという問題でした。組織を作ったけれども、実際は動いてないとか、持続が難しいというお話でしたが、おそらく皆さんの共通の課題なのかなという気がします。

例えば「私達こんなことができますよ」とか「こんなことやってる地域もありますよ」とかそういう情報があったら、まず、ここに参加していない人たちの活動もたくさんあるので、紹介をしてもらいたいと思います。

横尾ラジオ会

県庁舎の移転予定地は、条件が良くないところのように思えます。そのようなところに防災拠点を作るのかが不思議でなりません。例えば立山公園などの高台もあるし、他にもいろいろな場所があるように思います。

皆さんの、ご近所の底力みたいなものをしっかりお聞きし、地域でも伝えていきたいです。防災については、知らないことが多い。事前に横尾地区のことを知ろうと自治会のかたに聞きに行ったら、横尾は9区に分かれていて、防災グッズも備わっていると知った。今日は、ほかの方々の状況をお聞きしたいと思っています。

平常時の火事であれば消防車が走りますが、災害時道路は寸断されてしまって動けない。そういう時は、自衛隊しか対応できないのか、それともそういう対応をするためのオフロードカーやバイクはあるのか知りたいです。

個人的には、やっぱり毎日の声かけが大事だと思います。それができないと、災害時に果たしてコミュニティが機能するんだろうかと思えます。周りにどんな人が住んでるかも知らずに災害に対応できません。皆と仲良くする。これが最大の基本じゃないでしょうか。

人に対して干渉しない、それは大事なこともかもしれませんが、それが災害の時に、果たして皆さんが幸せになれるかなと疑問に感じます。あまり人に干渉するのもプライベートに立ち入るので大変でしょうし、その辺の兼ね合いが非常に難しい。「横尾ラジオ体操」では、皆が集まって、あいさつをすること、輪を広げること、みんなと知り合いなることを念頭に活動していますが、これも防災かなと感じています。



異常時には、常識論は通じません。価値観の共有は普段からやっていくことが大事です。

また、高齢者の火災予防についてですが、まずは、危険ものは置かないことに尽きると思います。



県庁舎の建て替えについては（市役所庁舎もそうですが）、どこを候補地に選ぶかというときに、ゼロベースではなかなか選べません。いろいろな条件をふまえながら検討していく中、現在地で建て替えると70億円も80億円もお金がかかってしまう。そこで、新しい場所をつくろうとなったんです。

東京ディズニーランドが今回の震災の時にも被害がなかった。ちゃんと地盤の強化がされているところは大丈夫で、2万人以上の方が3月11日の晩にあそこに泊まった。

今回の件も、ちゃんと強化して使うことで、今話が進んでいます。

長崎市消防局女性消防団

最近の大災害などにふれ、私達も防火だけでなく、いろいろな防災の面も一緒に考えていかなければいけないと感じています。

まちも生きもので、人も変わるし、まちも整備されたりすると災害も変わると思います。既存の紙芝居などだけではなく、長崎市に合ったスタイルを考えながら、今後は幼稚園とか自治会などで啓発活動を進めて行きたいと考えています。

以前もこのちゃんぽんミーティングに参加したことで、参加者同士で繋がりがもてました。こんな機会をもっともっと増やしていただいて、より良いものにいただきたいです。

消火器の使い方の指導などを行っています。消防の職員から「火災の時によく消火器がそのまま転がってる」ということを聞きます。やっぱり、実際に日常生活で消火器を使うことがほとんどないので、使い方は知ってるけど、実際その時になると、あせって使い方を忘れるということが多いそうなんです。だから、定期的に自治会の方達が訓練などをされるときに、私達も専門的なことは勉強していますので協力させていけたらと思います。

長崎防火研究会

火災現場の火災原因の調査結果から、同じような火災が繰り返し発生しているということを知り、その火災原因を周知するために漫画誌を作り、市内の金融機関などに1,000部ほど配布しました。

みんなで非番日に集って、それぞれ意見を出し合いながら、実際の火災現場で起きたことを参考にして漫画集を作りましたが、これだけでは効果が薄いので、ホームページに掲載しました。

また、クイズやゲーム、再現実験などもやりました。ホームページだけだと見る人が限られるし、実験などは直接見てもらった方がいいので、小学校や高校で防災教室とあわせて実施しています。



昨年度は、防災まちづくり大賞の最高位「総務大臣賞」をいただきました。これがきっかけでホームページのアクセス数が増えるかと思いましたが、今のところ、なかなか増えないようです。活動をPRするのは難しい。特に、防災や防火の周知は、自分たちで活動していても、どれだけ効果があったのかわからないのはなかなか見えないものです。

高齢化に伴って多いのが、コンロやストーブ、仏壇のろうそく受けなどによる着衣着火の火災です。普通、若かったら敏感だから気づくんでしょけど、歳を取ると動きが鈍くなって、どうしても気づくのが遅れてしまうんですね。

『火災がどうやって起きるのか』ということを具体的に知らないと、当事者意識がめばえません。(自分もこうなるかもしれない)とはなかなか思えない。それを知識として知っているだけでは、なかなか行動までは結びつかないんです。

例えば、電気火災の実験をやってみると、それまでは住宅火災警報器なんて必要ないと思っていた人が「すぐ欲しい!」「すぐ付けたい!」と変わる。
実験を見て、音を聞いて臭いをかいで、自分が体感することでわかるのでしょう。



強く感じるのは、お年を召されている方はどうしても経験で考えてしまうんですね。

「今までストーブの上で洗濯物を乾かしてきて80年間どうもなかったんですよ」って言って火事を起すことがあります。経験で考えることをなかなか覆すことができないんです。

タッチパネル式の映像を学校に設置して、子ども達が勝手に触って、実験映像や漫画を見れるようにしてますけど、やっぱり子どもの時期に防災意識を高めないと、なかなか、大人になってからだと難しいところがありますね。子どもから大人まで、おじいちゃんやおばあちゃんまで認知しようと思うと、それぞれの理解するレベルが違うわけです。だから、どう伝えるかを研究しなくてはならない。

また、科学的になぜ、私たちは逃げなくてはいけないのかとか、なぜここは危ないのかという根拠が理解されていないので、子どもに対しては子どもの目線でのツール、知的なレベルには知的なレベルで、科学的な根拠を基に、構造的なものとか、理解しやすい、入りやすいツールとか手法を使って伝えていきたい。



泉西自治会



長年、消防施設業に携わっています。火災報知器や消火器、屋内消火栓など人命救助にまつわるものがたくさんあります。若いころに、とても優れた製品があって、それを様々な行政機関に営業に回りましたが、新しいものがなかなか受け入れてもらえずに困ったことを覚えています。



「自分が担当の時に新しいものに代えて、何かあったらいけない」というような考えだったのでしょうが、せっかくなのになぜ受け入れられないのかと悔しくて泣いたこともありました。

今は状況は異なるかもしれませんが、そういうことではよくないと思います。

白木自治会

災害時に要援護者をどうするかが問われていますが、私達の地域も北陽町の状況に似ています。高齢化で役員のなり手がいない中で、地域について考える「白木地域推進力会議」というものをつくって、自治会とは別で活動しています。

昨年、市社協と長崎市が作った地域福祉計画についての会議があって、市職員や社協の方、包括支援センターの方々を交えて議論しました。その中で、どうしても、皆さんの意見を集約するためには、防災を考えた方がいいのではということになって、ちょうどこのちゃんぽんミーティングの募集があったので参加しました。継続して防災の活動ができるような、そんな秘訣があれば教えていただきたいです。



あと、地域の防災マップを作る時、全員の意見は聞けませんから、どういうところに注意すればいいか、また、どのくらいの規模で作ればいいのか、そういう事例を知りたいです。

自治会の高齢者が、役員になりたくないから脱退するという問題があります。それについては、高齢者は役員を免除するとしてもいいのではないかと考えています。



私も市内のあちこちの地域に行って、自治会の皆さんともお話をします。その中で、上手く回ってるなと思うところはやはり、自治会だけが頑張るんじゃなくて、老人会もPTAも育成協も包括支援センターも病院も大学も皆地域にある人たちは仲間なんだということで活動しています。

例えば、何か懇親会を年の始めにやりましょうって言ったら、いろんな人が集まって、結構盛り上がるんですね。それは、自治会だけでやっているのと、そのメンバーからなかなか広がっていくことがないんですけれども、色んな人たちが入っていると結構若い人たちがいて、その中から次の担い手が出てきたりだとか、先程防災リーダーの人たちが次の自治会の役員になったりとかいうこともあるかもしれない。

地域だけが頑張っても駄目だし、行政だけが頑張っても駄目だし、個人で頑張ろうとしてるだけでも上手くいかないことなので、皆が力をあわせないといけないことです。

そういう意味では、市役所の提供する色んな道具も上手に使っていただきたいと思います。防災マップ作りは最近力を非常に入れている分野ですので、是非使っていただきたいと思っていますし、市民防災リーダーも、上手なところは1つの自治会から何人も送り込むんです。何人も送り込むと、送り込んで勉強して帰った防災リーダーが孤立せずに、仲間がいるから何かやろうって具体的なことをやる時にも、すごくやりやすい訳です。そういう風に、上手に使っていただければと思います。

防災危機管理室・大浦青年会

平成 21 年から「市民防災リーダー」の取り組みを開始して、今 386 名ですが、中に、9 名のリーダーがいる地区（式見下浜自治会）があります。そこでは、今年また、新たに 4 名ぐらい、年内に養成しようとしています。そのリーダー達を全て、自治会の自治防災組織のリーダーにするということです。その方達を中心に災害時要援護者支援の支援体制も組んでいこうとしているんです。それには、相当の人数が要りますので、その体制作りに取り組んでいるんですね。

また、横尾地区で、各班のリーダーとなった全ての方に、防災リーダーの研修を受けてもらうというところもあります。自治会長さんだけではなかなか、「若い人に声を掛けづらい」とか「若い人の参加が少ない」というのは、どこの地域も一緒だろうと思いますけれども、それを逆に「自主防災リーダー」という形を上手く利用して、防災という切り口で、その地域の支援体制を構築していこうという動きもあります。

また、高城台地区の自治会長さんも防災リーダー研修を受けてくださっていますが、すごくリーダーシップがある方で、街の清掃とかも皆に出てきてくれるように呼びかけてます。年に 1 回避難訓練をやって、そこに消防とか防災の担当者がお手伝いをしています。



高城台の話がありました。新しい団地です。新しい団地って言うのは最初にばらばらの方にいくか、割とまとまる方にいくかで最初がすごく肝心で、一旦ばらばらの流れができてしまうと、なかなか協力体制が難しいっていう風になってしまいます。高城台の場合は、さっきおっしゃった、会長さんが学校なんかとも連携しながら、みんなを引っ張り出して、住民の皆さんもそこが当たり前というところからスタートしているので、色々な分野で非常に動きがよくなっています。先程の北陽町の例もそうですけど、皆さんが同じ意識になるというのは現実にはなかなか難しいので、リーダーの皆さんがチームを作って守ろうとしています。それがひとつのヒントで、皆さんが全部担うとなると難しいけれども、先ほどの「組織じゃなくてチームだ」という、チームをとにかく作ろうということで、ひとりではできないからまず防災リーダーを作る。防災リーダーに行ってもらって、帰って来た人をみんなチームにしようっていう今の分を、チームを作る段取りとしてのヒントになるような感じがします。





地域の中で、自助共助を実践しようというような動きもあります。自治会が学校と連携して、自治会の役員さんたちがずっと学校を回って、地域のこととか、ある程度年齢がいかなないと教えられないようなことを、学校の方で時間をとっていただいて教えるような取り組みをされているところがあります。

また、全国的に有名な山川河内（さんぜんごうち）という、自主防災の先駆けのような地域もあります。こうした地区で、市民防災リーダーを上手にを使って活動しておられます。他にも、今から活動しようとしていらっしゃるところが結構あるかと思います。

基本的には、災害時の道路が寸断した場合は、車で行くことは不可能です。長崎大水害の時も自衛隊も車両が入らなかったので、徒歩で、スコップ1つ担いで救助に向かった。本当に道路が寸断した時には、消防職員もそういった形になるかと思います。

軽トラックに積むタイプの小型ポンプというのがあります。それでも、4人でやっと担げるぐらいの重さですが、そういったものを担いでいって作業するしかない。

もうひとつは、ある程度大きな範囲で寸断した時にはそこには消防団というのがいますので、その時は当然、消防団が中心になって活動します。



インターネットなどで調べるとハザードマップというのがありますが、長崎市が昨年度から取り組んでいるのは「地域防災マップ」というものです。

地域内の、若い方から自治会の役員さんまでいろんな方が地域の地図を囲んで、地域の危険性を考え、災害時要援護者や一人暮らしの方を地図上に示すことで、「こんなにたくさんいるのか」「おばあちゃんは、こんな危険な所に住んでいるのか」と気づきます。

ハザードマップには表れない、「大水害の時にはこうだったよ」とか「大雨の時には浸かったよ」というような話が出てきます。それをもとに、その地域に特化した防災マップ作りをしています。皆さんで意見を出して、色分けなど、地域に応じた作り方で、自治会ごとにやるので時間はかかると思います。しかし、それを地図にして地域の方に配布することで、「うちの地元ってこうなんだ」というように考えていただければと思います。

地図を作る段階で要援護者の話はしますが、配布する地図からは外します。どういう風に共有するのか、その辺は自治会長も民生委員も社協の方も入って、みんなで一生懸命話をします。なかなか時間も短いので、「この一人のおじいちゃんをどうしようか？」まではいきません。「これをしなければいけない」「こんな方がたくさんいる」という次のステップに持っていけるようにしています。



歳をとると五感が鈍ってくる・・・忘れるというのもあります。普通だったら耳や目、鼻とかで感じるんですけども、当然、歳とれば五感が鈍りますので、そのために覚知が遅れるというのがあります。そのため、危険を排除するのが一番必要だと思います。火災報知器というのは、火災になる前の煙の段階で感知します。かなり早い段階で感知できるので、その段階で、どなたか近所の方が気づけば、どうか対応できるかと思っています。

3月11日に大浦で3.11を何か皆で考えようと、夏祭りのメンバーらが集まりました。保育園の先生達が皆で炊き出しをしたりとか、消防団体の方が、火災の実験というか、そんなものを集めたり、福島に避難支援に行った市職員にも手伝ってもらい、ダンボールをもらってきて、それをくぐってみたり、避難所を再現して、子供達を寝せてみるとか、そんなカタチで色々な手づくりの防災訓練をして、600人もの方が集まりました。

「おやじの会」というものも作っています。私達の世代はなかなか、地域のことに参加しない年代ですが、そういう人たちを引っ張ってきて、その年代の方のリーダーから横の繋がりを作っていけば、いいのではないかと思います。私1人でしているのではなくて、私の仲間が何人かいて、「じゃあやってみるか」とか言いながら、最初はどのようなかわからないけど、とりあえずやってみようという感じで、沢山時間をかけて基盤となる組織を今まで作ってきました。一度には無理かもしれませんが、小さな積み重ねが、何か大きな事につながっていくんじゃないのかなと思っています。



ふりかえり



阪神淡路大震災の時は、長田区という地区が一番被害がひどかったのですが、ああいうところはわりと下町というか、繋がりがまだ残っていて、「このうちのおじいちゃんはこの辺に寝ている」とかいうことがわかって、だからそこを最初から探せばよかったです。色んなコミュニティを知っている、顔を知っている、実際はそのことで助かるかたもいらっちゃって、それがいかに大事かということになった。実は「つながり」というのが、目には見えないけど一番の「セーフティーネット」なんです。

コミュニティが出来上がって、それから防災の事をやっと思えよう、じゃなくて、防災のことをテーマにして皆さんが集ってもらうことで少しそこから繋がりを作っていくって、逆方向が大事だということなんだろうと思います。ただ、去年の3月11日以降、防災が今一番共通の関心事になってるので、今のうちに色々しておく事が大事なのかなという気がします。



皆さんのお話の中に、実際に地域のなかでどんなことに困ったりどんなことで行き詰ったり、どんなことをしようとしているのかっていうこと等、今日も色々出していただいて、すごく参考になりました。

減災という考え方があります。それは、雨は防げないので、雨が降ったときに大雨が降ったときに、いかに亡くなったり怪我したり流されたりそういうことを少なくするか、被害を少なくするかっていう発想で、いろんな事を取り組んでいます。

防災リーダーもそうですし、防災マップ作りもそうです。早く逃げるということにつなげようっていうことです。そういう意味では是非、僕らも色んな工夫をしながら発信をしていきますので、一緒になって災害に強い町づくりを作っていければと思います。



参加者アンケート

初

初めて市長とのちゃんぽんミーティングに参加させていただき、実に有意義な時間を過ごすことができました。また、機会があったらと思います。

7.23 からもう 30 年も経つのですね。今日は関係者の集いの中での防災、実に色々な考え方の人、色々な方策を考え頑張っている方がいらして、参考になる部分もあり、今後の私自身の市民防災リーダーの動きの一助としたいと思います。

皆さん町内会、自治会とのからみ等の悩みは一緒でした。子ども達の教育にも力点を！

北

陽町の自治会で、役員が頻繁に替わるので、自主防災チームを結成したという話はとても参考になりました。また、自治会の未加入者が増え、さらに高齢化によるさまざまな現状を聞ける良い機会となりました。

今回は、このような会議に参加することで私たちの活動をPRするとともに、他の自治会へ協力するような話をするべきだったのですが、現状は、余暇を活用しての活動で、人員にも限りがある、積極的にPRできませんでした。これらの課題を早急に解決しなければと痛感しました。

※話をしている時に、デザートは食べづらい（特にスプーンを使うコーヒーゼリー）個人的にはコーヒーのみでも良いのではと思いました。

参

考になる話をたくさん聞くことができました。特に北陽町自治会、小瀬戸西自治会の話が印象深かったと思います。自分たちの活動のヒントになる体験話が良かったです。場の設定で気になったのが、関係部局の方が昼食返上で私達の食事を遠巻きに見ているというのが少し気になってちゃんぽんの味が落ちた気がします。

高

齢者の増加と災害に対する予防など問題点が山積みであることがわかりました。防火研究会の役割が大きいことも認識しました。

市

長さんに直に地域の実情をお話してきて良かった。もう少し時間がほしい。



参

加者の考え方や、物事の解決方法についての議論を聞かせていただき、皆さまの熱意を感じました。また、各々の災害対応は、場所、年齢及び家族構成により異なるため、それぞれに適合した人の意見を聞くことが大事であると思いました。



皆

さん、同じ悩みがあることを感じました。すぐに結果を望んでも出ないし、1人2人の参加者を増していけば活動につながることに、活動も、相手の顔を何度も見て初めて行ってみようと思いはじめるとかなと思います。

私達の市民力は力になると思うので、このような機会が増えると、知り合えたり勉強になったりします。自分の町を知ること、予防措置となり、減災へとつながるのではと考えます。

人とのつながりコミュニケーションを増やす機会を作るためには、小さなグループを一堂に集め、タウンウォッチングやウォーキングなどで楽しんでもらい、アンケートや気づきとして防災の視点で気づいた点をまとめる等、自分達の街は自分達で守る。

街も生き物で形が変わり、人も時代とともに災害も変わるし、災害の姿も町ごとに変わるので、防災意識を備え、自分も家族も命を落とすことがないようにする。いざというときどうすればよいかを皆さんと知恵を出し合うことが大事だと思います。